

ACTFL-OPI 超級レベルの詳細範囲について

-ILR レベルとの比較から-

小島堅嗣（培材大学校）

キーワード：ACTFL-OPI、ILR 基準、超級、発音、機能

1. はじめに

ACTFL-OPI は ILR1)の OPI を基にして作られている。そして ACTFL-OPI の超級は ILR のレベルでは 5 段階 (5、4+、4、3+、3) に分かれている。そのため「超級」の枠が 1 つである ACTFL-OPI の超級では、鎌田(2001:53)が述べているように「話者によっては「上級」のちょっと上にあたる話者もいれば、それこそ日本語のネイティブスピーカーとほぼ同様の能力を持つ話者もいることになる」というくらい範囲が広いものとなっている。本研究では、ACTFL-OPI 超級のデータを ILR レベルの基準を用いて詳細に検討することにする。

2. 本研究の目的

本研究では以下 2 点を探求課題とする。

- (1)ACTFL-OPI における超級データが、ILR レベルの中のどの部分に位置しているのかを検証する。
- (2)(1)の結果から、ACTFL-OPI の超級を複数の下位レベルに分ける必要があるか検討する。

3. 調査方法

ILR のホームページに記載されているレベル 5~3 のそれぞれの内容 2)の中から、各レベルを最も特徴的に表している項目を抽出して<表 1>に示した（原文は英文。翻訳は筆者による）。そして ACTFL-OPI 超級の調査協力者 10 名の発話内容がどの項目に、何か所当てはまっているのかを検証した。

3. 1 調査項目

<表 1> ILR の 5~3 判定のための項目

- 5 (1)発音がネイティブスピーカーの典型的なものである。
 - (2)教養あるネイティブスピーカーと機能的に同等
 - (3)語彙、イディオムなどすべての面で教養あるネイティブスピーカーに完全に受け入れられる。
- 4+ (1)ネイティブスピーカーの社会の知識があるが、すべての環境ではパフォーマンスを維持できない。
 - (2)時折、ノンネイティブの失敗を犯す。
 - (3)時折、語彙、口語表現、発音、文化の弱さを示す。
- 4 (1)言語能力はめったにタスクを妨げないが、(発音が原因で)めったにネイティブとは認められない。
 - (2)個人としては文化的・概念的にネイティブとは異なる分岐点にいたることがわかる。
 - (3)話題や口調で適切なシフトができる。

3+ (1)躊躇、不確かさがある。

(2)正確さとの確性はコントロールされている（複雑な修正によって）。

(3)低頻度または高度に複雑な構文にパターン化されたエラーが時々おこる。

3 (1)発音は明らかに外国人。

(2)不完全性はあるが、ネイティブスピーカーの理解を妨げるものではない。

(3)ストレス、イントネーション、ピッチのコントロールが不完全。

どの項目に当てはまるかという判定について、「発音」と「機能」の2つに分けて示した。一方は「発音」の項目(5(1)、4(1)、3(1))は、発話全体を通して判定した。もう一方の「機能」の項目は調査協力者の超級レベルの発話の中で実際に出現した箇所を抽出し、その個数を計測した。

3. 2 調査協力者

合計10名の調査協力者のデータを対象とし、詳細を<表2>に示した。<表2>におけるNO. 1～5の5名は国立国語研究所の「日本語学習者会話データベース」から引用したもの3)である。そしてNO.6～10の5名は2011年から2014年の間に、認定テスターである筆者自らが行ったOPIのデータを利用したものである。

<表2> 協力者と判定結果一覧

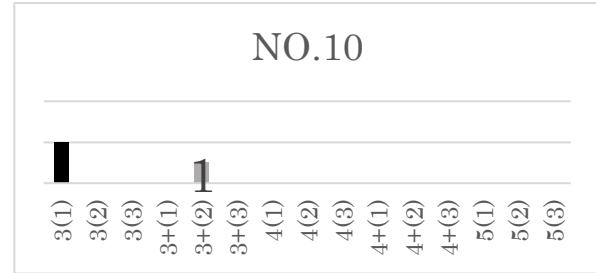
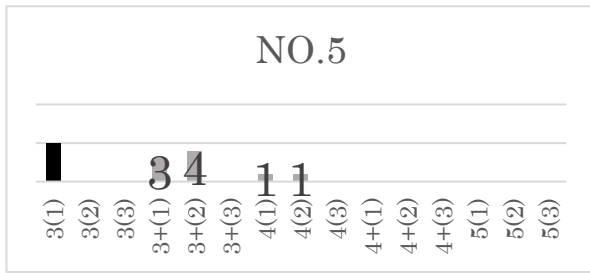
NO.	性別	年代	国籍	所属	日本滞在期間	判定結果
1	女性	40代	韓国	大学教員	15年	発音5、機能5
2	女性	40代	ブルガリア	大学教員	18年	発音4、機能4+～5
3	男性	40代	韓国	会社員	22年	発音4、機能3+～4+
4	男性	20代	韓国	大学生	5年	発音3、機能3+～4+
5	男性	20代	中国	大学院生	5年1か月	発音3、機能3+～4
6	女性	30代	韓国	大学教員	なし	発音4、機能4+
7	女性	20代	韓国	大学生	なし	発音4、機能4+
8	女性	20代	韓国	大学院生	2年	発音4、機能4+
9	女性	20代	韓国	大学生	なし	発音4、機能4～4+
10	男性	30代	韓国	大学院生	2年	発音3、機能3+

4. 調査結果

4. 1 判定の例

判定について、3.1で挙げたILRの5、4、3の各機能に該当する例を以下に一つずつ挙げる。まずデータNO.1の5の例である(98は発話番号)。NO.1はすべての面で教養あるネイティブスピーカーと同様であると判定した。

NO.1:98 難しい問題ですよね。特に医療の現場とか、かなりまあ、厳しい状況なので、そうですねまあ、これから高齢化社会とかいろいろ、少子化とかいろんな問題がすでに出てきてますので、まいろいろ制度を整備した上で受け入れていくという方向で考えないといけないかなって気がしました。⇒5(2)、5(3)



5. 考察

- (1)今回調査した 10 名の調査協力者の ILR レベルは 5～3 すべてが存在した。また 5～4、4～3 と 2 つの領域にまたがっている協力者も存在した。
- (2)今回の 2 つの判定ポイントである「発音」と「機能」の関連についてはおおよそ同じレベルである傾向があったが、調査協力者によっては 2 つの項目のレベルに若干の差異があるものもあった。
- (3)ILR レベル 5 は、日本滞在経験が長く、常に日本語を駆使する職業に就いている一部の被験者のみに限定されるようである。それ以外の多くの被験者は ILR レベルの 3 または 4 に該当することが推測される。
- (4)企業等で要望される日本語会話レベルによって、ILR レベル 3（業務遂行のための機能は果たせるが、発音にやや難がある）と ILR レベル 4（業務遂行も問題なく、発音もほぼ問題がない）の 2 つのレベルを分けて提示することも必要になる可能性があると考えられる。ただし企業等で要望される日本語会話レベルの詳細については、次回の課題とする。

注

- 1)ILR は、米政府機関 Interagency Round Table の略称。
- 2)<https://www.govtilr.org/Skills/ILRscale2.htm/> で 5,4+,4,3+,3 までの 5 段階の詳細項目を公開している。
- 3)「日本語学習者会話データベース」<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kaiwa/index.html>

参考文献

- エルヴィラ・スウェンダー、ロバート・ヴィカース(2012)『オーラル・プロフィシエンシー・インタビュー試験官養成マニュアル』(2012年版、日本語版),ACTFL
- 鎌田修(2007)「レベル判定の実例-超級」牧野成一他著『ACTFL-OPI 入門』, 52-65, アルク.
- 国立国語研究所「日本語学習者会話データベース」
<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kaiwa/index.html> (2019年9月13日検索)
- 牧野成一監修、日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム訳(1995)『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』アルク
<https://www.actfl.org/publications/guidelines-and-manuals/> (2019年9月13日検索)
- 牧野成一(2008)「OPI、米国スタンダード、CEFR とプロフィシエンシー」鎌田修・嶋田和子・迫田久美子編『プロフィシエンシーを育てる』凡人社, 18-37
- Interagency Language Roundtable “ILR Speaking Skill Scale”
<https://www.govtilr.org/Skills/ILRscale2.htm>. (2019年9月14日検索)